

養護老人ホーム入所者における終末期の対応事例

あわら市金津雲雀ヶ丘寮

(平成22年3月17日)

【はじめに】

終末期における「医療機関等との地域連携」および「身寄りのない方の施設対応」の視点から報告する。

【事例】

A氏（女性74歳・大阪市出身）早期アルツハイマー病・S状結腸癌術後。
平成20年1月、当養護老人ホーム入所（生活保護受給者）、当初から徘徊あり。

【結果】

入所後は自立した生活を送っていたが、認知症のため自分でパウチの交換できず看護師が処理していた。嘱託医および精神科専門病院の定期的診察により安定した生活が送れていたが、認知症の悪化に伴い、介護認定を受け併設の特定施設入居者生活介護施設に移る。この時期、同じく併設のデイサービスを利用している。病状については、血液検査を受けながら経過を診ていた。昨年より腫瘍マーカーが上がってきたため、本人に病状の説明をする。本人は「できるだけ苦痛を伴う検査・治療はせず、施設生活を送りたい」と希望される。昨年12月中旬からほとんど食事を摂らなくなり、食欲不振に加えて熱発・黄疸も出てきたため、嘱託医と密に連携を図り、あわら病院地域連携室に相談し12月21日入院となる。身寄りがないため、当施設職員がたびたび訪問し、地域連携室と連携を図りつつ回復を願っていたが、本年1月9日永眠。

【まとめ】

当施設は、養護老人ホームの中に特定施設があるため、自立した生活を営んでいた方が要介護状態になっても“今まで住み慣れた”場所で介護が受けられ、最後までその人らしい過ごし方ができるメリットがあると考えます。今後も「人対人」としての関わりを深め、入所者の「安心・安楽」な生活の提供に努めたい。

また、この事例を通して、地元嘱託医・精神科専門病院・あわら病院地域連携室・あわら市担当課等との連携を図ることにより、本人はもちろんのこと、職員も安心してケアすることができました。そして「地域連携の重要性」を痛感しました。

最後に、逝去した後のすべてのことについても職員が懸命に対応し、現在、当施設の共同墓地に眠っていることを申し添える。